

小樽運河

舗装された歩道とガス灯が歴史ある小樽運河に並び、以前は倉庫だった建物が今ではレストランや店舗、博物館を収容しています。小樽運河は 20 世紀初頭に活気ある貿易港だった町の歴史を思い出させるとともに、地元住民の保護活動のシンボルとなっています。

20 世紀初頭、小樽は北日本最大の商港でした。商船は、本州から品物や食料を運んできて、小樽近海でとれたニシンを積んで戻って行きました。舩が湾内を行き来して、船と岸壁の間で品物や乗客を運びました。1882 年に開通した北海道初の鉄道で小樽まで輸送された石炭が日本中に出荷されて日本の工業化の原動力となりました。

港を通る貿易の増加に伴い海岸は舩で混雑するようになりました。1914 年から 1923 年にかけて、幅 40 メートルの水路を挟んで岸壁に平行に並ぶ幅の狭い島々の列が埋め立てられました。水路ができたことで舩が停泊するスペースに余裕ができ、後に小樽運河として知られるようになりました。

やがて木造の帆船は次第に巨大な貨物船に置き換わり、1937 年に新たな埠頭が完成して舩を使わずに船が着岸して積荷を下せるようになりました。同じ頃、この国のエネルギー需要の主流が石炭から石油に代わり、主要港としての小樽の地位は損なわれていきました。そして、運河も使われなくなりました。

1966 年に、道路拡張のため運河を埋め立てて隣接する倉庫群を撤去する計画が浮上すると、地元住民がこの地域を保護するため運動を起こしました。1980 年代に和解に至った後、運河の大部分とその周りの倉庫群が改修されました。小樽運河の北側はほぼ昔のままで、かつてこの街が財を成すのを助けた舩の代わりに小型の釣り船が並んでいます。